3）乳児院退院児の家庭への適応（その２）

庄司順一　帆足英一
金子　保　二木　武

はじめに

乳児院に入院することは，子どもと家族とが分離を経験することを意味する。そのような，乳児院に入院していた子どもが，退院して，家庭へ帰ることができるようになったとき，子どもと家族とは，互いに新たな適応をすることが必要になる。

前回の報告では，主として，乳児院を退院した子どもが家庭へ適応するまでの期間について検討した。今回は，例数を増して，前報告での知見を確認するとともに，適応するまでに児が示す反応について検討し，さらに，最近経験した，退院後の事故例についても報告する。

方　法

対象は，母子保健院乳児院を，昭和５４年１０月から，５７年４月末までに退院し，家庭（里親委託を含む）へ復帰した児８２名のうち，退院後１～３ヶ月間に面接のなしえた４８名（男児２３名，女児２５名：自宅復帰３８名，里親委託１０名）である。

結果と考察

1. 退院後の経過

家庭へ帰った児は，多くの場合，何らかの種類の，何らかの程度の反応を示す。

表1.は，退院直後にみられた問題として，親が訴えたものである。ここでは，程度や持続期間は考慮していない。

これらの反応は，基本的には，家庭という，施設で育ってきた児にとってはなじみのない状況に対する不安の現われであったり，あるいはその不安を解消しようとするアタッチメント行動であると考えられる。

母への拒否的な反応（「きらい」という，抱こうとするといやがり，手をたたくなど）は，精神障害の母親になじまないという１例を除いて，短期間のものであった。

父への拒否的な反応（いやがる，なじまない），入浴をいやがるなどは，男性が少ない，おとなといっしょに入浴することがないなどの乳児院での生活経験を反映しているとみることができる。

次に，家庭に適応するまでの期間（表２）については，表１に示した反応がみられなくなった時期にもとづいて決定した。

家庭になれるまでの期間は，前回の報告と同様に，退院時の年令，在院期間，および面会の頻度との関連がみられた。すなわち，退院時の年令が低く，在院期間が短かく，面会頻度が高いほど，家庭に適応するまでの期間は短かい傾向が認められた。もちろん，家庭への適応については，これらの要因のほか，家庭での児の扱い方や，児の気質的特徴など，多くの要因が関与しており，今後さらに検討していく必要がある。

2. 退院後の事故例について

退院後，家庭に適応するまでである程度の期間を要するものの，その後の経過は良好なものが多いという印象をもっていたが，最近，退院後に殺害したり，虐待された例を経験した。

これらの児は，５３年から５６年に退院した児で，事故は，５４年から５７年におきたものである。事故の内容は，殺害されたもの２例，突然死１例，被虐待１例であった。

上記期間の退院総数は１４０例で，突然死を除いた，殺害，虐待の３例は，２％に相当する。

第１例は，継母により殺害されたものである。離婚による養育困難のために，１才１ヶ月で入院，１才１１ヶ月のとき，再婚した父親のもとへ引きとられた。退院後１年６ヶ月，本児３才５ヶ月のとき，新聞報道により，継母に殺害されたことが判明。本児が継母になつかなかったこと，心疾患があったなど，手がかかったこと，継母に実子が誕生したことなどが要因と考えられた。

第２例は，精神障害の実母に殺害されたものである。１才３ヶ月のときより約１ヶ月間入院，退

院後２２日に，同居していた祖母が外出したすきに事件がおきたことが，新聞記事により判明した。

第３例は，突然死と思われる例である。生後１ヶ月のとき，母親が妊娠中毒後遺症のために，双生児の兄とともに入院。１才６ヶ月のとき退院。退院後２ヶ月のとき，警察からの間い合わせにより，死亡したことが伝えられた。のちに家族からの話では，原因不明の突然の死亡で，急性心不全といわれたということである。

第４例は，虐待により，植物状態となってしまった例である。家族の結核により，生後２日で入院。１１ヶ月で退院。退院後９ヶ月のとき，某病院より，被虐待により緊急入院したとの連絡を受けた。

これらの児に比較的共通していたことは，①家庭状況が不安定，②面会が少ない，あるいは面会に父母のいずれしかこない。③退院後，遠隔地に居住したり，行方不明となったため，follow－up が困難であったことなどが指摘される。

家庭への適応は，退院時年令が低く，在院期間が短かいほどスムースであることを考えると，できるだけはやい退院が望ましいが，危険が予想される場合には，慎重な対処が必要である。

表1.　退院直後の問題（N=４８）（複数回答）

母へのあとおい	9
母への拒否的な反応	4
父への拒否的な反応	10
泣　き	8
表情乏しい	6
しゃべらない	2
そわそわとおちつきない	3
食　事	8
排　泄	4
睡　眠	21
入　浴	18
な　し	9

表2.　家庭に適応するまでの期間

A	当日から	9	}	15
B	１～６日	6		
C	１～２週	9	}	13
D	３～４週	4		
E	１ヶ月～	13	}	15
F	２ヶ月～	2		
G	３ヶ月～	5	—	5

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

乳児院に入院することは,子どもと家族とが分離を経験することを意味する。そのような,乳児院に入院していた子どもが,退院して,家庭へ帰ることができるようになったとき,子どもと家族とは,互いに新たな適応をすることが必要になる。

前回の報告では,主として,乳児院を退院した子どもが家庭へ適応するまでの期間について検討した。今回は,例数を増して,前報告での知見を確認するとともに,適応するまでに児が示す反応について検討し,さらに,最近経験した,退院後の事故例についても報告する。